



# 04歳J〇がDQN達に脅迫レイプ

## されて変態性癖に目覚めるCG集

DOJIN  
R18  
成人向け

女騎士の城

私の名前は二条凛で年齢は〇四歳。都内の〇学校に通う二年生で、生徒会長をつとめています。自分で言うのも何ですが、正義感は強い方なので、生徒達が安心して生活できる〇学校を目指して、日々活動しています。

そんなある日、とある生徒から相談を持ちかけられました。

【凛】「暴走族？」

【生徒】「うん…最近帰り道に出てきてナンパしてくるの…もう怖くて怖くて…」

【凛】「先生には相談した？ 警察には？」

【生徒】「先生に相談したんだけど、何とかするからと言ったまま何もなくて…」

それに先生が警察には相談するなって言っていて…私もうどうしたらいいか…」

【凛】「わかったわ。私からも校長先生にかけあってあげるから」





【凛】「なんで何もしてくれないんですか！」

【校長】「な、何もしてないわけじゃないよ。まずは状況を調べてから……」

【凛】「そんな事言ってる間に被害でも出たらどうするんですか！」

【校長】「でも、まだ何もやってないんじゃない、こっちからはどうする事も……」

【凛】「何かやったあとでは遅いんですよ……」



校長先生と交渉してみましたが、事なかれ主義で全く話になりません。

警察への相談も考えてみましたが、警察も被害が無ければ動いてくれないでしょう。

その生徒は今日にも被害に会うかもしれないのに、悠長な事は出来ません。

【凛】「わかりました。もう先生には頼りません。私が生徒会長として何とかしてみせます」

【校長】「お、おいおい……問題だけは起こさないでくれよ。警察沙汰になったら困るからな」

【凛】「失礼しますっ！」



【生徒】「ごめんね…一緒に帰ってもらって」

【凛】「これも生徒会長の務めだから安心して。それに私、護身術やってて強いんだから!」

しばらくの間、私はその生徒の送り迎えをする事にしました。

少し回り道になりますが、学校が動いてくれない以上、私が何とかするしかありません。

【生徒】「凛さん…そろそろ暴走族が出てくる公園の前だから…」

【凛】「わかったわ。暴走族がナンパしてきたら私が追い払ってあげるから」

いくら護身術をやっているからと言って、相手は年上の男で、しかも暴走族です。

私は緊張していましたが、生徒を不安にさせないよう、堂々と笑顔を浮かべました。

そして交差点を曲がって公園に差し掛かった所で、バイクに乗った男が数名、

私達の方へと近づいてきました。





【男】「今日もかわいいね。今日は友達と一緒に？ いいかげん俺と付き合っただろ？」

【生徒】「ふ、ごめんなさいっ…それはっ…」

【男】「いいじゃないじゃん、バイク乗せてどこでも連れて行ってやるからだよ！」

男達は嫌がる生徒を無視して、

無理やり腕を引っ張ってバイクに乗せようとしてしまった。



【凛】「嫌がってるでしょう！ やめてくださいー！」

【男】「なんだお前？ へえ、良く見るとお前もめちゃくちやかわいらしいじゃん！」

【凛】「私はこの子の通う〇学校の生徒会長です。迷惑な行為はやめてください！」

【男】「迷惑な行為ねえ…迷惑な行為ってこういう事？」

【凛】「キヤアッ!？」

男はきなり後ろから抱きついてきました。私は思わず背負い投げをしてしまいました。





【男】「さっしーやりやがったなー！」

【凛】「逃げるようー！」

【生徒】「は、はいっ……！」

こうなれば暴力沙汰ですから、  
嫌でも学校や警察が動かざるを得ません。  
後は無事に私達が逃げるだけです。  
しかし、私が生徒を先に逃がした所で、  
私の背中に電撃のような激痛が走りました。

【凛】「キヤアツ……！」

男の手にはスタンガンがありました。私は立っていられず、その場に崩れ落ちました。





【凛】「んっ……んはっ…」

私が目を覚ますと、そこは公園ではなく  
廃棄された工場のような場所でした。  
そこには数十人の暴走族と、  
ソファに寝かされる生徒がいました。

【男】「お目覚めかな？ 凛ちゃん」

男は私の生徒手帳とスマホを見ながら、ニヤニヤと話しかけてきました。

【男】「いくら〇学生と言っても、いきなり投げ飛ばしてくるような奴には、  
大人としてきっちりお仕置きしてやらなきゃいけないと主ってな。  
俺達のアジトにしてる廃墟工場に来てもらったんだ」





【凛】「こんな事…誘拐ですよ！ わかってるんですか!?!」  
【男】「凛ちゃんこそ、自分の今の状況わかってる？ 君達は今からレイプされるかも知れないんだよ!」

レイプという言葉聞いた時、私は恐怖で体が固まりました。  
それ以上に、私の軽率な行為で、生徒に危険な目にあわせてしまった事を  
強く後悔しました。



【凛】「：貴方を投げ飛ばしたのは私です。この子は関係ない!」  
【男】「そういうわけにはいかないね。連帯責任って奴だ。」

でも、君がどうしてもその子を助けたいと言うなら、考えてやらん事もない!」  
「：どうすればいいんですか?」

【凛】「俺達だって君達をレイプして犯罪者になりたいわけじゃない。」

【男】「君が自分の意思で俺達とセックスしてくれるなら、その子には金輪際手を出さないでやるよ!」



「凛、わかりました！私が自分の意思で、貴方達の相手をすればいいんですね？」  
「男」 「そうそう。物分りいいじゃん」  
「男」 「そうと決まったら、とりあえずパンツ脱いで、俺達のチンポを入れる割れ目を見せてくれよ」

男達のはやし立てる中、私は震える手でパンツをぬいで、スカートをめくり上げました。



「凛、これでいいですか…」  
「男」 「流石。四歳、パイパンじゃん！」  
「男」 「お前、生理用品がカバンに入ってたけど、もしかしてお前って潮前？」  
「凛」 「…しよ。潮はまだ来てません…」  
「男」 「マジかよ！潮前のパイパン女子の学生とか、もう生で中出しするしかないじゃん！」

男達は私の割れ目をまじまじと見つめ、スマホを取り出して撮影し、盛り上がっていました。





【男】「さて、それじゃ凛ちゃんの希望で俺達とセックスしたって証拠、残しておかないとな」

男達はそう言った後、車に積んであった撮影機材を持ってきて、私の周囲にセットしました。また同時に、私のカバンからノートとペンを取り出して、ノートに台本を書いて手渡してきました。

【男】「それじゃ凛ちゃん、よろしくね」

私は無理やり作り笑いを浮かべ、カメラに向かいました。

【凛】「は、初めまして！私の名前は一条凛、市内の学校で生徒会長をやっています…。

実はまだ○潮前なので、今のうちに沢山中出しセックスがしたいと思い、

優しいお兄さん達にお願いして、ついにセックスが出来る事になりました。

初体験の思い出に、映像を残しておきたいと思います」





【男】「へえ、凛ちゃんはHな子なんだね。もっと足広げて見せてよ」

私は男に言われるまま、その場にしりもちをつき、

両手で足を抱えて、両足を大きく広げました。

あまりの恥ずかしさに、表情が険しくなりそうでしたが、

私は自分からHをしに来た演技を続けなければなりません。

【凛】「はい…これでいいですか？」

男達は私の顔と割れ目を交互にじっくり撮影します。

カメラには私の割れ目がしっかりと映し出されています。

【男】「綺麗な割れ目だね。それじゃあ広げてみようか」



【凛】「キヤアツッ!?!」

男はいきなり私の割れ目に手を伸ばし、左右へと引っ張って割れ目を広げてくださいました。私も見た事が無い割れ目の奥、ピンク色の肉ひだがはつきりと余す所なく撮影されていきます。

【男】「どうしたの? いきなり声を上げて」

【凛】「ちよ、ちよっとびっくりしちゃって!」

こんな恥ずかしい所を広げられ撮影されるなんて、恥ずかしくて死にたくまりましたが、私が頑張らないと生徒が犯されます。私はとにかく変態女子○学生を演じる事に徹しました。





【男】「それじゃあ入れるための準備をしようか」

男は私の割れ目を左右に開いたまま顔を近づけ、  
薄汚い唾液をたっぷりとまぶした舌を伸ばし、  
私のピンクの肉壁を丹念に舐め始めました。

【凛】「ひっ……!? あああっ……!」

最初はおぞましいと感じていた感触も、

男のなれた手つきと舌使いにより、

だんだんと気持ちよく感じ始めていました。

こんな男にいいようにされて気持ちよくなるなんて悔しいです。

でも、私には選択権はありません。男に身をゆだねるしかありませんでした。





